

道隆寺・吾平・笠之原の史跡巡り（鹿屋ふるさと探訪会）

開催日：令和7年4月23日（水）

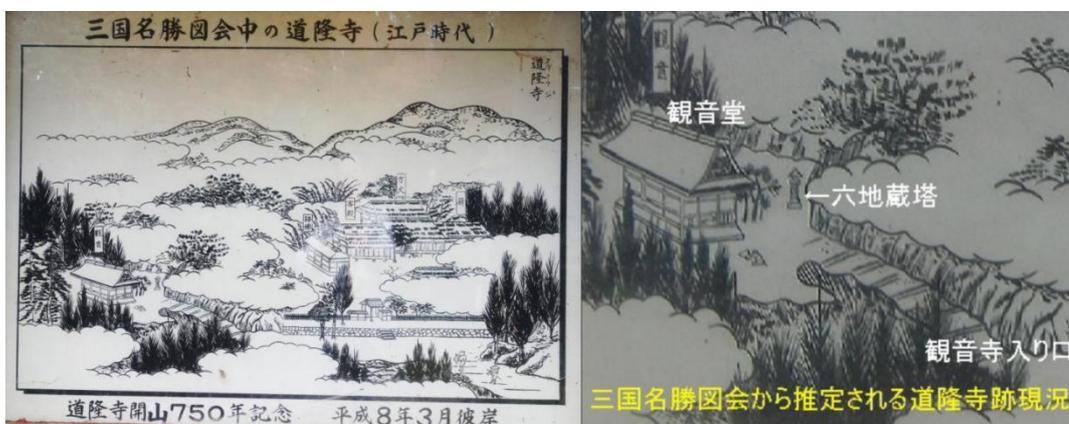
集合時刻と場所：9時に本城集落センター（肝属郡肝付町新富 9110）

参加費用：昼食会費は1,500円（当日徴収）

当日、肝付町にある道隆寺跡に鎌倉の建長寺（臨済宗建長寺派の大本山）から、9年ぶりに第240世の吉田正道管長他7名が来られて回向が行われた後に、近くの本城集落センターで昼食会が開催される予定です。極めて稀で貴重な機会であるので、我々も法要と昼食会に参加させていただき、その後吾平と笠之原の史跡を巡ります。

1 道隆寺跡 — 日本初の禅寺の跡（肝付町高山本城）

日本で最初にできた禅寺「道隆寺」の跡が、大隅半島の肝付町高山の本城（ほんじょう）にあります。寺の全てが明治初期の廃仏毀釈で徹底的に破壊されたため、跡地として残りました。江戸時代の三国名勝図会には、破壊される前の寺の姿が描かれています。



道隆寺は、鎌倉時代の寛元4年（1246年）、南宋の禅僧である蘭溪道隆（大覚禅師）が開山し、7年後の1253年に、鎌倉幕府第5代執権の北条時頼に請われて、蘭溪は鎌倉へ赴き、臨済宗建長寺派の大本山である建長寺（以下は現在の写真）を開山しました。



土に埋もれていた道隆寺の遺物を、肝付町の元役場職員で地主の福谷 平氏が、昭和59年から公務のかたわら寸暇を惜しんで一人で整備を始め、その献身的な活動に心を動かされた人々の協力もあり、ほぼ40年をかけて、現在のようなすばらしい姿にまで復元しました。木や竹の根が絡んだ重い石塔などを掘り起こして組み立てる作業は、想像を絶するご苦労があったはずです。



「肝付観光協会」のホームページには、現在の寺跡の様子が以下のように書かれています。「本堂などがあった場所は水田になっていますが、林の中には観音堂跡があり、仁王像、ヤグラに刻まれた磨崖五輪塔、宝塔、経塚、六地藏塔、無縫塔（むほうとう）、灯籠、鎌倉時代から戦国時代に至る数多くの五輪塔が古い歴史を物語っています。」

その他に禅僧の墓、琉球国僧之墓、廃仏毀釈時に地下にかくされていた地藏菩薩などもあります。平成18年（2006年）には、6代島津氏久と7代元久の逆修供養塔（本人が生前に建てた供養塔）が発見され、肝付氏と島津氏の関係が良好な時期があったことがうかがえます。11代忠昌の供養塔は柳井谷の陣（忠昌本陣跡）の下、湧輪から移設したものです。

平成21年からは、鎌倉五山の中心的存在である建長寺の吉田管長（85歳、昭和14年生まれ）をはじめとする建長寺の御一行が道隆寺跡を訪れています。今回は8人が来られるそうです。

2 飴屋敷観音（吾平町上名飴屋敷）

この観音は、上名飴屋敷の東用水路の東上にあります。この観音（総高174センチ）の台石に、「惟眨（これとき）享保六（1721年）辛丑（かのとうし）六月吉祥日」と刻んであり（今から304年前）、完形の石像で真に立派な観音です。吾平町内にある7体の観音を代表する観音です。明治の初めの廃仏毀釈の「諸仏うちこわし」のときに、石像の観音だけは災いをのがれました。



【備考：近くにある飴屋敷跡】海の神様で本当の姿は大きな「わに」であるトヨタマヒメは、夫の山幸彦に、「出産の時は本来の姿に戻らなければなりません。絶対に見ないでください」とお願いしました。しかし山幸彦は、約束を破ってのぞいてしまいます。心外に思ったトヨタマヒメは産んだばかりのウガヤフキアエズノミコト（神武天皇の尊父）を残し、海に帰ってしまいました。乳飲み子を残された山幸彦は悲嘆にくれました。そこに一人の老婆が現れ、母乳の代わりに米で作った飴を練り、その飴のおかげで成育できたそうです。この飴屋敷跡はその飴を差し上げた人の住宅跡と伝えられています。

3 本車田の田の神像（吾平町上名車田）

県内でも珍しい山水付きの田の神像です。白質粗面の岩を丸彫りした像で、引き続いて山水を表現したと思われるものが刻み添えてあります。像の高さ83センチ、山水の高さは43センチ。渦巻模様のシキをアマダに被り、袖の長い上衣と熟着け袴をつけている。左手はメシゲ、右手はスリコギを持つが、スリコギの上部は欠けている。おだやかな面相は珍しくよく残っている。像の傍らの、



小山水の面には磨崖仏風に小仏像らしいものが浮彫りしてある。また頭上にも胸元にも更に小さい仏像がつけてある。この山水は修験道場としての山を示していて、その山から現れた効験あらたかな僧を田の神としたことを教えているものと思われる。車田の田の神像及び山水、台座は同じ石で、台座を含めての高さは93.5センチ、同じく山水の高さは53センチ、横は中央付近で80センチ、下部で69センチあり、現在北向きに鎮座しておられる。昭和62年8月22日吾平町文化財指定。

【備考：吾平の修験道】吾平町には、先祖が山伏であった鎌田家、牧家、白坂家があります。その内、白坂家は吾平山上陵にあった鶴戸権現の社殿が、戦国時代に洪水で流失すると、それを再興するなど、古くから吾平山上陵と深い関係がありました。その吾平山上陵の西方にある福師岳（282.6m）を、白坂家は霊場とし、修行したと伝えられています。

4 持田水害記念碑（吾平町下名持田）

吾平町誌によると、「昭和24年6月20日夕方より来襲したデラ台風は、豪雨を伴い、大隅地方にその猛



威を振り、之による当町の持田地区の災害は最も悲惨で、その被害は実に言語に絶するものがあつた。」と書かれており、死者 23 名の他に各種の被害状況が具体的に示されている（水害記念碑には死者 26 名、家屋流出 41 戸、負傷者数十名、牛馬の死亡 15 頭、復旧恩人 坂口助次郎町長と書かれている）。しかし、多数の死者が出た原因と水害時の状況は書かれていないので、持田水害の体験者の前村チエさんから、水害の体験を聴き取りました。持田水害の原因は、吾平から高山に行く県道（今の 73 号線南側の旧道）の南側の窪地にあった排水口が詰まったため、台風による大雨でその窪地に多量の水が溜まり、その水圧で県道が決壊して、県道北側の谷間にある持田集落に濁流が襲ったためです。

【備考：坂口助次郎（1883～1959 年；明治 15 年～昭和 34 年）】鹿師範卒・小学校長・薩摩郡社会教育主事・私立商工学校長、第 13 代村長・第 1 代町長であった。敗戦で困窮し、打ちひしがれた村民を奮い立たせ、町制を進展させるために尽力した。具体的施策は、①困窮した町民の食料難を打開。②町の行政機構を刷新し、町制を実施。③吾平中学校の創設、町立の定時制高校の設立。

5 権現島（吾平町下名権現島）

下名の井神島の南にある田の中の小山が権現島で、ここに伝説があります。この付近は肝付氏と島津氏が戦った場所と伝えられています。肝付勢は、この辺りのぬかるみに大木を浮かべ、島津勢を迎えました。島津勢は、ぬかるみと大木に悩まされて、けが人と死者がたくさん出たそうです。もちろん、肝付勢にも沢山の犠牲者が出て、戦いの後で、死者とその鎧、兜、刀など多くの物を権現島に埋めたそうです。ところがその後、夏の夜には権現島から巨大な鬼火（青白い火）が、高山町の本城（高山城、本城集落センターの横にある）へ向かって飛んで行くそうです。



権現島の頂上には、徳丸権現（徳丸神社）があるので、権現島と呼んでいます。この神社の神様は、鵜草葺不合命と猿田彦で、天文 3 年（1534 年）に造られたと伝えられています。島津家 11 代島津忠昌は永正 3 年（1506 年）に肝付家 14 代の肝付兼久の居城である高山城を攻めているので、伝説の両軍の権現島付近での戦いは、この時代の頃のことでしょう。なお、高山城での合戦では、肝付氏を支援する軍勢が多く、高山城は陥落せず、島津軍は鹿児島に引きあげました。島津忠昌はその 2 年後に自殺しました。

6 始良郷下名人配・永代移者顕彰碑（吾平町下名川崎）

江戸時代初期（明暦・万治）から幕末期までの約三百年間、薩摩藩では、薩摩半島（西目）から大隅半島（東目）に人を半ば強制的に移動させて、農耕をさせる政策をとりました。この強制移住の圧政には、苦悩したり不満をもった人が少なからずいたはずですが、藩政以後は、自由を求めて大隅半島に移住した人が多かったそうです。



この政策を「人配」と呼び、読み方は「にんべ」または「にんばい」です。移った人々を「永代移者」と呼び、名寄帳に加え、門（かど）の籍に入れました。人配の対象は、門百姓はじめ郷士・町人にまでおよんでいます。

始良郷（今の吾平町）への移住者の場合は、薩摩半島から鹿児島湾を藩船でわたり、高須・浜田を経て瀬筒峠を越えました。この峠は、永代移者が故郷の薩摩半島を望む最後の場所であったので、「人配峠」と呼びます。その後、大始良、南を経て始良に着きました。この道筋を「人配街道」と呼びます。現在の吾平町の 4 軒に 1 軒は「人配」による移住者の後裔であろうと言われています。人配の人たちは、用水路開拓、新田開発、畑地開発に努め、今日の「美里（うましさと）吾平」の美田をつくりました。吾平町下名の始良川の吉田橋の近くに、「始良郷下名人配・永代移者顕彰碑」が有志によ

り平成9年に建立されました。永代移者が田畑の開拓に貢献し、吾平の発展に寄与した記念碑です。

(トイレ休憩：どっ菜市场)

7 笠之原の登り窯の跡（笠之原焼を訪ねる）



・笠野原（笠之原）について

笠野原地頭館より卯の方一里、中之村にあり、当郷東方一面の広野にして、東西二里、南北三里に過ぎたり、北は高隈に至り、東は串良高山の二邑に接せり、此原野の間に、田畝を開き、処々松林あり、又当郷より串良へ通ふ、大道東西に亘て、松の並木列をなす、其他諸邑往来の岐路あり、此地にの朝鮮帰化の民居住の所あり（朝鮮帰化の事は伊集院苗代川の條下に詳なり）初め伊集院苗代川の朝鮮人、三十余戸を分ち、此地に街巷を開き、宅地を畫し、ここに居らしむ、実に宝永の初年なり、それよりして歳に繁り、月に昌へて、今八十余の戸数に及へり、衣服、言語、苗代川の俗に異なることなし、常に耕作を業とす、寛政年中より、始めて陶器を造ることをなせり、この地水なし、井戸を穿つこと大凡三十余尋、皆轆轤を施してこれを汲む、また人居より相距ること十町許、北に神社あり、高麗国の靈神を崇め祭り、華表に扁額を掛け、玉山宮と題す、享保十年正月勸請せりといふ、（玉山宮は、伊集院苗代川にもあり、祭神の事は彼卷に詳なり）

（『三國名勝図会』より）

・笠野原と萩塚原

苗代川の人口が増加したので、苗代川移住後 100 余年、宝永元年（1704）から 2 年かけて、藩主綱貴の時代に現在の鹿屋市^{かさんばい}笠野原に、その一部の人たちを移住させている。その数は 30 余家男女 160 余名であった。

笠野原は旧肝付郡鹿屋郷中名村にあつて中名村の東方一面の広野で、東西 2 里、南北 3 里に亘る高原で、水は乏しく風は烈しい荒野であった。この移住計画は、増加した苗代川の人たちを使って、新たな不毛の地を開拓させるのが主な目的であった。

移住した人たちは農耕の暇々に製陶に従事したので、製品は日用雑器が主であった。笠之原焼は陶法、釉ともに苗代川同様であるが、やや粗雑な感があつて、胎土も荒々しい。徳利などの胴部には地名が篋書^{へらが}きしてあるものが多い。

幕末ごろになると笠野原も人口増加したため慶応 2 年（1866）11 月、80 家 351 名が笠野原から 8 キロほど離れた現在の太始良星塚敬愛園の近くの萩塚町に分住している。昔は萩塚原、あるいは笠野原の南にあたるので南居原^{なんきよばい}とも言っていたという。

祭神は苗代川、笠野原と同じ玉山神社の分祀である。昭和の初めごろまでは元、沈、金、何などの朝鮮名が多かったが、現在は日本名に改姓している。萩塚の玉山神社は、地元では「高麗神」とも呼ばれている。同地でも一時苗代川から陶工を招いて焼物を焼いていたが、ここも笠野原同様の原野で風害が甚しく、そのうえ水に乏しいので調度に不便なため、短期間で廃窯している。伝世品は全く

見られない。

笠野原窯の様式は朝鮮伝来の半円筒形単式傾斜窯であったといわれている。現在伝世している製品は苗代川の堂平窯跡の黒もんとよく似ている。徳利の底部には貝目を使用している。

(『日本の陶磁』9 薩摩 向田民夫著より)

・笠之原に伝わる高麗餅（シロ）

鹿児島では法事菓子の主役として高麗餅を使用することが多い。「これがし」とか「これもち」と呼び、小豆餡と米の粉をこね合わせた蒸し菓子である。高麗餅が鹿児島に伝わったのは、慶長三年（一五九八年）朝鮮の役により、豊臣秀吉の命を受けて出兵した島津義弘が、李朝の陶工たちを南原（ナモン）から捕虜として連れ帰った折に一緒に伝えたとされている。鹿児島県鹿屋市笠之原地域では、この高麗餅を「シロ」と呼び、地域の玉山宮では祭事や行事の際に高麗餅「シロ」を奉納し、‘餅返し’の儀式をおこなっていた。同様に薩摩焼窯元日置市東市来町美山でも、高麗餅を作っていたという記録が残されている。

美山の玉山宮の設立に当たり、一時は「異国の神を祀るべからず」という島津家の厳しい弾圧を受け、日本の祭神を祀っていた時期もあったという。沈壽官氏は「玉山宮が建立されたことで、村人たちの結束が強くなり、やがて祭事も生まれ、高麗餅を供え物とし、‘餅返し’という儀式を生み出したのではないかと推察している。韓国より連れてこられた陶工たちは、望郷の念により玉山宮を通して陶芸の文化や高麗餅を伝え継ぎ、地域の住民により祭事のしきたり等を大切に守り伝えてきたと考えられる。

韓国で餅は、誕生日やご先祖様の祭祀など、喜び事や人生の節目に作られている。笠之原で高麗餅は、氏神祭り（同じ氏を先祖として祀る神）の際に親戚が集まり、祭祀の後に供されてきた。また毎年、春は旧暦二月十四日、秋は旧暦八月十四日に大祭が行われる。この春と秋の大祭は玉山宮にて神降ろしの神事が行われていた。神降ろしの際には宮司が韓国語の祝詞を唱え「神降ろしの儀」を行い、神託（人の口を借りて告げられる神の意思）により集落内を巡幸していた。その後に直会（なおらい）と呼ばれる宴会を行い、祭りの儀式で使われた高麗餅や供え物、酒などのお下がりを参列者は分けて食していた。春と秋の大祭の他には「山登り祭」という祭りも行われている。「山登り祭」では集落の人々が山舞楽（さんぶらく）（写真）と呼ばれる小高い丘に登り、春は豊作祈願、秋には野菜や穀物を奉納する収穫祭が行われていた。その際にも高麗餅は供え物として神前に奉納されるものであった。また美山でもかつては、旧暦の八月十五日の夜になると村人たちが集まり、山舞楽に登り、祭事が行われていた。そこでは「オノリラ」という神祝歌（かみほうぎうた）を歌い、祖国へ望郷の祈りを捧げたと伝えられている。³⁾ このオノリラという歌は、朝鮮の役の際、南原落城後に作られた歌で、当時の朝鮮半島の民衆の間で広く歌われ、神様に捧げる歌として歌い継がれていた。おそらく笠之原でも山舞楽においてオノリラが歌われ、先祖の霊を偲び、故郷への思いを馳せていたことが推察できる。高麗餅は食す餅としての意味だけではなく、豊作祈願や神占いなど人々が生活するうえで欠かせないのでできない祭事に用いられた特別な食べ物であったといえる。

(『大隅』65号「笠之原に伝わる高麗餅」 浮中菜々子より)



さんぶらく
山舞楽での祭りの様子（笠之原）

(『大隅』65号)



苗代川の神舞図
(三国名勝図会 伊集院の項)

